

BUI Thanh Huong 教授

2011年東日本大震災後の 沿岸地域におけるレジリエンス構築



天災は忘れた頃に来る（寺田寅彦）

2011年3月11日に発生した東日本大震災から10年となり、被災地の復興を評価する上で重要な節目の時期となります。自然災害によって壊滅的な被害を受けた地域は、どのように変化し、レジリエンスを構築してきたのでしょうか。近年、災害レジリエンスに関する出版物が急増しています。しかし、危機や災害管理に関連した観光の研究はレジリエンスに関する文献とうまく結びついていないため、観光分野におけるレジリエンスの概念化には疑問が残ります。

大規模災害からの復興は長期的なプロセスであり、被災地の公共機関や民間団体の密な連携を通じた長期的なアプローチが必要です。災害からの復興は、観光業が段階的な役割を果たすことで、変革的なレジリエンスを構築するための機会を開くことができるかもしれません。観光に関する研究は、大規模災害で壊滅的な被害を受けた地域の再設計という複雑なシステムの中に組み込まれており、災害リスク管理、地域計画、再活性化に関する議論と切り離すことはできないのです。



既存の文献でこれらのギャップが認められたため、本研究では、東日本大震災で被災した地域の社会学・生態学的な幅広い文脈の中で、レジリエンスと観光を結びつけています。具体的には、東日本大震災から復興した気仙沼市の事例から観光が災害後の復興の原動力としてどの程度活用されているかを分析します。

この研究では、英語の文献が比較的少ないと言われている日本の取り組み、観光を復興の柱とするアプローチを分析することで先行研究とのギャップの解消に貢献します。実際、大規模災害により大きな被害を受けた地域の復興のために観光を活用することは、他の地域にとっても重要な教訓となります。また、複数の問題を解決するためには、ボトムアップレベルでレジリエンスを構築すること、資源とイニシアティブを組み合わせることが必要であるということを訴えています。復興を成功させるためには、経済セクター間および人と自然の間の相互依存関係を深く理解すること、そして危機に直面した際に、人々がその状況に適応し変化していく能力を持つことが必要です。



学部

アジア太平洋学部

研究分野

観光学、商学、社会心理学

アドレス

huongbui@apu.ac.jp